

# 紀州街道

佐藤 良士

紀州街道は江戸時代、大阪の高麗橋から和歌山城下に至る主要街道であった。

その道程は、高麗橋から日本橋を経て、住吉、泉州堺を南に、高師浜、泉大津の助松本陣から岸和田、貝塚、泉佐野へと続く。泉佐野からは熊野街道と合流して、鳥取の庄、山中宿、山中川にかかる境橋を渡り、紀州藩主の山口御殿があった山口宿を経て、田井ノ瀬の渡しで紀の川を越え、西に向うと紀州藩五十五万石の城下に入る。

もう一つ、泉佐野から海沿いに樽井、尾崎、深日を経て孝子峠、あるいは大川峠を越える道も開かれ、時にはこちらの道も紀州街道と呼ばれた。

紀州街道は泉州を育てた道である。清原和博も東洋の魔女もこの道からやってきた。

紀州街道は紀州を結ぶ道である。前畑秀子も坂本冬実もこの道から故郷に帰った。

今回歩くのは岸和田市街のほんの一部だが、「上方史跡散策の会」の本と、和歌山出身の作家、神坂次郎さんのエッセイから岸和田に関する紀州街道の話題を書いてみた。

**紀州の殿様** 紀州街道の歌というわけではないが、「まりと殿様」という歌がある。

てんてん てんまり てん てまり (略)

おもての行列なんじゃいな 紀州の殿様お国入り 金紋先箱 供ぞろえ

西条八十作詞のわらべ歌で、歌は紀州の殿様の行列にまりが飛び出して、紀州まで行列と一緒にってしまうという歌だが、「殿様お国入り」というわけだから、歌の舞台は泉州、すなわち紀州街道ではないだろうか。

古代から中世に祈りの道、信仰の道として発達した熊野街道に代わって、近世に入ると海岸べりを走る紀州街道が泉州の主要街道になる。江戸時代、紀州街道は経済の道、産業の道として発展したが、何より徳川御三家、紀伊大納言の参勤交代の行列が通りすぎる道だった。というが、それは後代のことで、初代藩主頼宣(よりのぶ)から6代宗直までの百三十年間は、紀の川沿いの大和街道から五條を経て、伊勢街道を松阪に向った。(そのルートは先月の「背の山を歩く」の麻殖生さんの「南海道について」に詳しい)。

参勤交代は江戸に向かうわけだから、明らかに大坂、京を経て東海道の向う紀州街道のルートは遠回りと思われるが、それはたぶん、二人も徳川將軍を出した大藩の紀州の殿様ということもあるが、なにより、大経済都市大坂と結ぶ紀州街道の発展ということもあっただろう。



**いこらいのら** 「紀州さんとは 夢にもしらぬ いこら いのらで 気がついた」

江戸時代に泉州路で歌われていた民謡である。街道の茶店で一服していた旅の衆が、「さあ、行こら」とか、「いのら、いのら」とか喋っているのを耳にして、紀州者だと気がついた、というのである。「いのら」は帰ろうということだろう。

当時の紀州藩は幕府の御三家、特に武士は特別待遇もあってか街道や宿場ではずいぶん威張っていた。渡し舟に乗るにも、船着場に立って、「御番であるぞ」と、声を上げると、その瞬間から渡し舟は紀州藩の御用舟扱いになってしまい、他の待ち客は乗船を拒まれたという。特権は藩士ばかりではない。紀州藩の領民が旅の途次、関所を通過する時などは、関所役人は道中手形の紀州の文字に息がかからぬよう、目の上にして改めた……と伝えられている。

藩士や領民でさえそうだから、紀州藩主の行列が通行する場合の尊大さは想像がつく。岸和田城下を通過する場合など、岸和田藩主は礼服で威儀を正して出迎えるのが通例で、その際、紀州藩主は、「出られ候か」と、一言、声をかけて通り過ぎるのが例になっていた。

先の民謡は、このような紀州藩の特権を苦々しく見た街道筋の人々の思いを伝えたもの。明治維新で紀州藩が御三家の特権を剥ぎ取られた時、新政府は真っ先に、

『これまでの御格を以て、権威を振り候ことなど致すまじく 』

と、紀州公に通告した。明治4年、紀州14代藩主・徳川茂承(もちつぐ)が東京に向かった時が、紀州街道を紀州の殿様が往来する最後になった。

しかし、それは十数名の従者が従うのみの淋しい行列であったという。

**泉州玉ねぎ** 泉州の名産の一つに「玉ねぎ」があげられる。しかし、この玉ねぎは元から泉州にあったものではなく、明治の中頃に岸和田の郡役所に居た坂口平三郎によって、水田の裏作用にと始めて栽培が始められた。坂口はアメリカから種子を取り寄せ、密かに実験栽培を行なったが、物珍しげに畑を覗きにくる隣人に

「触ったらあかん！ これは焰硝の木やさかい、手に触れるとドカンと爆発するぜえ」

こうして育てた玉ねぎは、明治18年、大坂天満市場に出荷されるが、この奇天烈な野菜は人々に「ラッキョの化け物」と言われ、仲買人にさえ見向きもされなかった。

泉州の玉ねぎがようやく実を結ぶのは、明治27年の日清戦争の後で、他の野菜より栄養価が高く、貯蔵のきく玉ねぎを大量に軍が買い上げ、それを食べた兵士たちが各地に帰郷して行って、裏作に適した玉ねぎの栽培は一挙に日本中に広がることになった。

今日、我々の食卓にかかせない玉ねぎは、こうして岸和田から始まったのである。



**だんじり祭り** 今回の「久米田・岸和田」例会の下見は10月8日、この前日の7日は久米田池周辺の八木や山直（やまだい）の地区のだんじり祭りの日で、だんじりの解体風景や、十字路に残るだんじりの車の跡に出会った。

有名な岸和田城下のだんじり祭りは9月半ばだが、東の山手地区では「岸和田十月祭礼」と呼んで10月に行なわれる。岸和田ばかりではない。泉州はだんじりの国である。鳳でも高石でも泉大津でも貝塚でも和泉でも熊取でもだんじりが出てくるが、ほとんどが十月の第一日曜に地車が引き出され、ハッピーを着て鉢巻を締めた兄ちゃんが、扇子を振りかざして地車の屋根を左右に飛び跳ねるのである。

岸和田のだんじり祭りは、江戸時代の元禄16年（1703）時の藩主であった岡部長泰が、三の丸に京都の伏見稻荷を勧請し、五穀豊穡を祝う稻荷祭りを行なったのが始まりといわれる。この時城下の庶民が長持ちに車をつけたような「だんじり」を曳いて城内に入り、二の丸御殿の前で神楽獅子を舞い、にわか芸を披露して藩主を喜ばせたことから祭りが恒例化した。

祭りは9月宵宮と本宮の二日間、宵宮の日の早朝6時頃から岸和田地区19台のだんじりが曳き出され、勇壮に町中を駆け巡り、夜になると約二百個の提灯が地車に飾られ、昼間とは違い華麗に変身してゆっくりと町中を練っていく。本宮の日は岸城神社、岸和田天満宮などで宮入りが行なわれ、カナカラ坂（市役所前）を一気に駆け上がったの豪快な「やりまわし」が祭りのハイライト、テレビ番組でよくあるだんじりが家屋を破壊する「やりまわし」のシーンは、道幅の狭い紀州街道である。

地車は大部分が櫓作りで新調すると何億もかかるといわれ、「税金の滞納はあっても地車には金の出し惜しみはしなかった」といわれる泉州人の魂が宿っている。岸和田祭りに訪れる観光客は60万人、昔はこの日のご馳走は大阪湾で獲れる「わたり蟹」と決まっていたが、今は漁獲量も減り、滅多に食膳にのぼらない。

**泉州燃ゆ** 昔、といってもほんの数年前、ぼくが堺で普通の会社員生活をしていた頃、若い後輩に「雑賀君」がいた。雑賀君は仕事も良く出来たが、上司や先輩に思ったことは何でも言う男で反骨精神を持っていた。僕があるとき、「君は紀州の雑賀党の末裔か？」と聞いたら、彼は「そうです」と答えた。権力に靡くことをよしとせず、鉄砲一つで戦国の世を駆け回った雑賀党のイメージを、ぼくと同じように彼も描いているのだろう。

その雑賀集団が根来衆と連合して、天下統一の野望に燃える豊臣秀吉の軍勢に立ち向かったのは、天正13年（1585）。この時秀吉側は十万の大軍、先方が泉州の堺に達しているのに、最後尾はまだ京を離れていなかったといわれる。その遠征軍は3月21日に岸和田城に布陣する。



一方、対する根来・雑賀連合軍は3万、こちらは根来寺の衆徒を中心に泉南地方の一向門徒の農民、土豪が加わって、現在の貝塚市の千石堀、積善寺沢、高井、畠中など、紀州への街道沿いの城塞に立てこもった。

この時、岸和田城を守っていたのは中村一氏で、秀吉を城内で迎えた軍議の席上、「当国第一の堅城、千石堀城をまず攻撃すべき」と主張、秀吉はこれを入れて、豊臣秀次を大将とし、これに堀秀政、筒井順慶などの著名な戦国武将が参加した主力軍が千石堀城を攻めたが、天下の根来・雑賀衆が守る城は簡単には落ちなかった。

当時の農民は、後の徳川時代の農民たちではない。つねに自衛のための弾薬、食糧を村々に蓄え、鉄砲や槍で武装した自主独立の気に満ちた農民集団である。

「秀吉、何するものぞ！」

連合軍は潮鳴りをあげて押し寄せる秀吉軍団に、銃弾を炸裂させた。が、しかし、紀州連合軍は不運であった。弾薬を取り出すために開いた弾薬庫に、筒井順慶隊が放った火矢が飛来し、千石堀城は一瞬大音響をあげて爆発し、千六百人の根来衆徒が飛散、城は炎上して果て、この瞬間に根来・雑賀連合軍の敗戦が始まった。

高井城、畠中城がみずから城を焼いて退去、最後まで抵抗を続けた積善寺城も城を開いて、城兵たちは南へ走り、紀州の山野目指して落ちて行った。この時秀吉の断滅作戦で、岸和田以南の泉州の野は焼土と化したといわれる。

**紀州街道の今** ぼくがつい最近まで勤めていた会社は堺にあって、南海の七道駅が最寄駅だから新今宮から南海で通っていた。紀州街道はこの南海電車に沿っている。いや、紀州街道のほうが古いから、南海が紀州街道に沿っているというほうが正しい。

会社に居たとき、職場の鹿毛さんの家は七道駅の近くにあったが、「ええ、家の前が紀州街道です」と、言っていた。鹿毛さんは小倉の人だが、社内恋愛の奥さんが堺の人で、そういう事情から鉄砲と刀鍛冶で有名な古い町に住むことになった。

そういう事情で、僕は会社の帰りなどに紀州街道をよく歩いた。堺から大和橋を渡って、住吉さんから新今宮まで1時間ちょっと。途中、住吉大社界隈や天神の森、阿部野神社のあたりでは小さな旅気分が味わえるし、大阪人の僕には、岸の里や天下茶屋の迷路のような細い路地がなつかしい。南へは浜寺、高石を経て和泉大津までは南海主催のハイキングで歩いたが、その先は行っていない。

紀州街道は、鹿毛さんのような人には身近な生活道路として生きている。今回ポコアで訪れるのを機会に、この古くて新しい道を和歌山までの全行程を歩いて、「紀州街道の今」をレポートしたいと思うのですがどうでしょう。

(参考資料)「紀州街道」(上方史跡散策の会)

「熊野まんだら街道」 神阪次郎

「大阪府の歴史散歩」 山川出版社

